

看護学生が捉えた「へき地」に暮らす人々の生活・価値観

平山恵美子・登内芳子

The Life and Values of the People Living in the Remote Place
Which a Nursing Student Grasped

Emiko HIRAYAMA and Yoshiko TONOUCHI

要旨：I 短期大学看護学科成人看護学においては、地域医療の特徴と対象の理解を深めるため一日間ではあるが「へき地巡回診療実習」を行っている。本研究は学生がへき地に暮らす人々の生活・価値観をどのように捉えたのかを明らかにし、今後の教育活動の示唆を得ることを目的としている。質的研究手法を用い分析した結果、看護学生が捉えた「へき地」に暮らす人々の生活・価値観に関わるカテゴリーは、①豊かな生活、②不便な生活、③工夫した生活、④健康生涯を抱えながらの生活、⑤生活を維持、⑥離れて暮らす寂しさ、⑦住民どうしの強い絆、⑧慣習、⑨自分らしくかけがえのない生活の9分類であった。カテゴリー及び記述から、学生は、へき地で暮らす人々は豊かさも不便さも分かち合いながら生活し、何らかの健康障害を抱えながらも精一杯働く毎日をおくり、そして自分らしく生きていると捉えていることが明らかとなった。しかし意味の捉え方が抽象的で浅い部分もあるため、学生の対象を理解する力を深めるよう、更なる教育方法の改善に努めたい。

Key Words：生活 (life), 価値観 (values), へき地 (remote place), 看護学生 (nursing student)

研究背景及び目的

I 短期大学は長野県南部に位置しており、看護学生が赴く実習施設に於いては、山深き地域からヘリコプターで運ばれ入院する患者も多い。このような背景を基に成人看護学実習では、平成14年度より地域の医療の特徴と対象の理解を深めるため「へき地巡回診療実習」を取り入れている。周囲4 km以内に医療施設が無いへき地^{注1)}は過疎高齢化が著しく¹⁾、公共交通機関や日用必需品の買い物など様々な面での不便を抱えている。実習初年度の学生の学びは「へき地地域住民に提供される医療サービスの実情の理解とへき地に暮らす人々の生活の様子を知ることができた」²⁾で

あった。対象の理解は、臨地実習の中でぜひとも理解を深めさせたい重要な教育内容である。しかし、患者の生活背景や不便だと思われるその地になぜ人々が暮らし続けているのか、患者個々の生活・価値観に焦点を当て理解を深めることが不十分であった。教育方法を検討するためへき地医療における看護教育に関する文献を検索したが、1995～2004年において皆無であった。そこで平成16年度は、単に人々の生活の様子を知るに止まらず「①地理的制約のある所で生活をしている人々の生活背景・生活像・価値観に焦点を当て人々の生活を知ること、②実習をとおり様々な生活があることの理解に繋げる」を学習目標に

表1 「へき地巡回診療実習」の展開方法

実 習 当 日	午 前	<p>＊事前学習</p> <p>目的：へき地に暮らす人々に関心が寄せられ、意図的情報収集へと繋げる。患者個別記録や実習申し送りノートを活用。</p>
	午 後	<p>＊へき地医療拠点病院^{注2)}であるA病院の巡回診療に参加。（臨地実習）</p> <p>I 短期大学より片道2時間の距離にあるH地区の集会所（巡回診療の場）へ赴き、診療の補助及び診療後の茶話会をととして対象理解を深める。</p>
実 習 終 了 後	12 月 初 旬	<p>＊成人看護学実習の全日程が終了後</p> <p>1人の患者について継続的に記載された患者個別記録を参照し、受け持ち患者の生活に視点を当て、実習の振り返りを行う。</p>

掲げ、患者受け持ち制、患者個別記録（1年間のその人[個別]の生活を学生がバトンタッチしながら継続的に記録していく個別記録）などを導入し、教育方法を改善し実習を展開した（詳細は表1を参照）。学生がへき地に暮らす人々の生活・価値観をどのように捉えたのか実態を明らかにし、今後の教育活動の検討資料とする。

研究 方法

1) 対象・調査時期

I 短期大学看護学科3年生67名のうち本研究への参加の承諾が得られた53名に対し、2004年度成人看護学実習が終了した12月7日に調査を実施した。

2) データー収集の方法

「へき地巡回診療実習」に関する質問紙を作成し、集合調査による記述的調査法³⁾を用い、参加者に自由記載を求めた。

〔質問内容〕

①「へき地巡回診療」に関すること

②「へき地に暮らす人」に関すること

③「へき地に暮らす人々の生活」に関する
こと

3) 分析方法

質的研究手法^{4)～7)}を用いて分析した。本研究で2名で質問紙よりへき地に暮らす人々の生活・価値観に関連した項目「へき地に暮らす人」、「へき地に暮らす人々の生活」を取り上げ、研究テーマである“生活・価値観”と関連の強い文脈を抽出し、データー化した。次にデーターを解釈し、関係性をみながらコード化し、生成された複数のコード間の関連性を吟味しつつ生データーに立ち返りながら包括的にまとめ、カテゴリー（category）を生成した。そして、生成されたカテゴリーとコードの関係性を再度吟味しながらカテゴリーの名称や定義の修正変更を行った。これらの分析プロセスの中で現象の抽象化を進め、研究テーマである学生が「へき地に暮らす人々の生活・価値観」をどのように捉えたのか、その実態を帰納的に明らかにしていった。

分析結果の妥当性

本研究で得られた分析結果をアクセス可能な対象者5名に提示し、検証したところ「自分の感じていることがきちんと文章になって整理されている」などの反応が得られ、分析結果の支持が得られた。

倫理的配慮

本研究は、以下のとおり研究参加者の自発的な同意とプライバシー保護を行う。

1. 本研究では、研究者らが作成した「研究参加御協力お願い（主旨説明）」を用い、研究の主旨を説明し理解を得た参加者に対して質問紙調査を行うのみである。また、参加の自由、記述の自由記述途中で

の参加取り消しも保証しているため、参加者の自発的同意は保障される。

2. 質問紙調査に参加した個人の記述内容は、研究者のみが閲覧し、厳重に保存され個人が特定できない形で報告され、研究終了後、記録は破棄されるため、研究の対象となる個人のプライバシーは保護される。

表2 カテゴリー及びコード一覧

グループ	カテゴリー	コード	記述数
生活状況	豊かな生活	住民同士の親密な交流	2
		楽しみや生きがいのある生活	10
		ゆとりのある生活	5
		慣れ親しんだその土地が好きで心地よい	11
		そこに住むものにしかわからない良さ	2
		生活環境が健康に役立つ	7
		豊富な自然環境	2
	生活不便な	買い物や交通に不便な生活	7
		不便な生活	2
		農業で生計を立てることの難しさ	2
	生活工夫した	不便な中で工夫した生活	6
		今あるものを最大限に使った生活	3
	抱えながらの生活	身体に不都合を抱えながらの生活	7
		症状がなければ病気を気にかけない	2
		生活環境からくる身体的不都合さ	5
		薬の管理の難しさ	2
	生活を維持	不便さに馴染み気にならない生活	8
		自然の中に馴染んだ生活	5
		自ら行う健康管理	6
		自給自足の昔ながらの生活	11
		収入源は農業	2
		精一杯働く生活	5
	暮らしを離れ	家族と離れ離れの寂しい生活	2
社会	強い絆	住民どうし親密で助け合い・支えあう	10
		住民どうしの強い仲間関係	2
		そこでの生活や慣習を守る	3
価値観	自分らしく生活	自分らしい生活	3
		かけがえのない生活	4
		自ら決定していく生活	2
		生活スタイルを変えない	2

結 果

調査は本研究者によって平成16年12月7日に行われた。参加学生（以下学生）のテーマに関連した総記述数は154であった。分析の結果、学生が捉えたへき地に暮らす人々の生活・価値観に関するカテゴリーは①豊かな生活、②不便な生活、③工夫した生活、④健康障害を抱えながらの生活、⑤生活を維持、⑥離れて暮らす寂しさ、⑦住民どうしの強い絆、⑧慣習、⑨自分らしくかけがえのない生活の9分類であった。表2に分析で得られたカテゴリーとコード及び記述数の一覧を示す。カテゴリーの意味分析の便宜上 1) 生活状況に関すること、2) 社会に関すること、3) 価値観に関することの3グループに大別した。

抽出されたカテゴリー別に学生の記述を引用し、説明を加える。文中の《》はカテゴリー、『』はコード、「」は質問紙に記述された言葉である。

1) 生活状況に関すること

このグループでは、へき地に暮らす人々の生活の営みや生活を取り巻く状況について記述されていた。

カテゴリー1《豊かな生活》

経済面での豊かさを指しているのではなく、自然に恵まれ、時間や心にゆとりがあり、楽しみや生きがいを持って生活していることを意味していた。

『楽しみや生きがいのある生活』では、学生はへき地に暮らす人々が不便ながらもいきいき楽しく生活していると感じ取っていた。例えば「近所に店や病院も無く道も坂道ばかりで不便…でも皆さんいきいきとしておられ近所との仲もよく、大変ながらも楽しく生活しておられると思った」や「畑をやったり、果物を作ったり、その人なりに生きがいがあり、楽しく生きていると思った」と記述され

ていた。また、『ゆとりのある生活』では、人々が窮屈でなくゆったりと生活していると肯定的に捉えていた。例えば「せかせかせずゆっくり時間を過ごしてとてもすばらしいと思った」という記述があった。『慣れ親しんだその土地が好きで心地良い』では、人々が仕方なくその地で生活しているのではなく、生まれ育った土地が好きであり最も住みよいところであると感じていると捉えていた。例えば「自分の生まれ育った土地が一番自分にとって住みよい所なのだと感じた」や「自分が今暮らしているこの地域をとて好きなんだと伝わってきた」と記述されていた。『豊富な自然環境』では、へき地は自然にあふれ感性を刺激することが多い暮らしであると捉えていた。例えば「自然にあふれていて…感性に訴えかけてくることが多い暮らしがそこにはあるのだと感じた」と記述されていた。

カテゴリー 2 《不便な生活》

この地は山奥であるため買い物や交通に不便な生活である。また、農業中心で収入も充分でなく経済的な意味からも不便さがある。

『買い物や交通に不便な生活』では、ほとんどの学生が実際に行ってその地の特徴を目の当たりにし、自身が感じた不便さを述べており、視点は買い物や交通・病院に集約されていた。記述内容は見たままの不便さであり、実際その不便さがどのようなもので、人々がどう感じているかなどに言及しているものは少なかった。例えば「近くにスーパーなどがなく買い物するにも不便」や「最寄の駅までも時間がかかるし、交通の便が無くて不便だと思った」と記述されていた。一方、〈農業で生計を立てることの難しさ〉では、へき地に住む方々との会話の中から、実際農業で生計を立てることは難しくつましい生活をしていると感じ取っていた。例えば「農業で生計を立てることはやはり困難であるようであり、外に働きにも出ていないため不便がある

のではないかと記述されていた。

カテゴリー 3 《工夫した生活》

交通や買い物に不便であるが、不便な中で少しでも生活しやすいように買い物の仕方や保存方法を工夫したり、身近で採れる自然のものを利用したり、今あるものを最大限に使って生活している。

『不便な中で工夫した生活』では、主に買い物の仕方や保存方法など不便な中で工夫していることが、詳しく・具体的に述べられており、生活を捉えるといった部分で深まりが見えた。また、学生は自分達の生活を省みたり、その違いから驚きやへき地の人々への尊敬の念を抱いていた。例えば「生活物資の入手が難しい中で冷凍保存したり自給自足の生活をしていたり、とても生活の中での知恵というものを感じた」や「…数キロ離れた地区まで買い物に行ったり、まとめ買いのため車でショッピングセンターへ行くといった工夫が見られる」、「私たちはなくなったらすぐコンビニやスーパーに行って必要なものを買えるけれど、きちんと計画的に自分が必要なものを考えて食材を買って生活してと、私たちが見習わなければならないことがいっぱいあると思う」、「…その環境の中で上手に生活をしていることに驚かされた」と記述されていた。『今あるものを最大限に使った生活』では、物が無いことや足りないことを問題としてすぐに買うのではなく、あるものを使って困らないように工夫して生活していると捉えていた。例えば「物が足りないと考えるのではなく今あるものを最大限に使って生活していると思った」と記述されていた。全体的に学生はへき地の人々の合理的で計画的な生活の仕方や、積極的に前向きな生き方に驚きと感銘を受けていた。

カテゴリー 4 《健康障害を抱えながらの生活》

へき地に暮らす人々は皆、何かしらの持病を

持ちながらも働くことが優先される生活をしており、またそのような生活のありようや厳しい自然環境が健康障害へと繋がっている。

『身体に不都合を抱えながらの生活』では、学生はへき地に暮らす人々の生活は、身体の痛みを抱えながら持病を持ちながらも厳しい自然の中で毎日働かねばならない大変な生活であると捉えていた。例えば「高血圧のある人が多く病院にすぐ受診できない環境で畑に一日中いたり…暑くても、寒くても関係なく重労働をしていて大変…」や「怪我をしてもどこか痛くても働く生活」と記述されていた。またそのような生活のありように学生は「今はまだ、不自由な部分があっても何とか作業を行うことが可能だが、今後が心配」と気づかいをしていた。しかし、『症状がなければ病気を気にかけない』では、へき地に暮らす人々は症状がなければ自分の病気に対しては特に気にかけていないと捉えていた。たとえば「…症状がなければ平気という考えなのだと感じた」や「自らの疾病に対しては、特に意識していないように思う」という記述があった。『生活環境からくる身体的不都合さ』では長年農業を続けていることや重労働などを少ない人数で人力に頼っていること、厳しい自然環境の中で生活していることによる身体的負担などが健康を阻害する一因であると捉えていた。例えば「雪かきなども少ない人数で行うため、(機械もないようだし…)かなり重労働であり負担がかかっているようだった」や「多くの既往歴を持っており、腰痛症などは田畑を作っている人だからだと思う」、「円背の人が多かったのは坂道を歩く習慣のためか」と記述されていた。そして『薬の管理の難しさ』では「薬が家に残っていることから服薬が毎日できるような工夫が必要ではないかと思う」と薬の管理ができていない人に対して自己管理ができるような援助の必要性を考えていることが伺われた。

カテゴリー 5 《生活を維持》

へき地で暮らし続けるためには慣れ、健康管理、生活基盤、精一杯働くことが必要である。

『不便さに馴染み気にならない生活』では、学生は人々がへき地での生活が不便であることは分りきっており、むしろへき地での暮らしを続けている中で不便と感じないほどそのような生活にも慣れ、順応していると捉えていた。例えば「交通が不便であったりするがそこで暮らす人々にとってはそんな生活が当たり前…」や「…御自分で野菜を作ったり、買い物もお子さんに連れて行ってもらったり、配達サービスを利用したり、意外に不便はないようだった」、「交通や買い物に大変不便な場所に住んでいても、その地域に順応して生活していることが感じられた」と記述されていた。『自然の中に馴染んだ生活』においても同様に、人々が自然に慣れ親しみその土地にあった生活をしていると捉えていた。例えば「自然の中に人が溶け込むことが当たり前…」や「へき地なりの生活に順応していることが感じられた」と記述されていた。また、「自然を大切にし、自然の食事に、暗くなったら寝てと規則正しく現代の人々が見習わなくてはならない生活をされている」と自然の摂理に適った生活を好ましく思い自分たちの生活を省みる記述もあった。

カテゴリー 4 ではへき地に暮らす人々を『症状がなければ病気を気にかけない』と捉えていたが、ここでは生活を維持するため自分の出来ることを自分でしようと心がけ、健康に気をつけ、しっかり健康管理をしていると捉えていた。例えば次のような記述があった「腰痛や関節痛、高血圧など高齢者の方に多い症状であったが、薬は2週間分一度に処方されており各自でしっかり健康管理を行っている」や「身体に気をつけて、身体に良いものを食べ、畑などを耕し、自分の出来ることを自分でしようと心がけていた」。記述内容は『症状がなければ病気を気にかけない』

に比し詳しく具体的であった。

このカテゴリーで特に学生の意見が多かったのは『自給自足の昔ながらの生活』であった。「自分達で生活していこうとする意欲が強く、自給自足の生活をしていたことがなかった」と、殆どの学生は、自給自足の昔ながらの生活をしていることに関して肯定的に捉えていた。しかし一方、「農協の配達があるとはいえ、そのほとんどを自分たちで作った作物に頼っている」と生活の脆弱性を指摘している者もいた。また『収入源は農業』では、「農業が主な仕事であり、それを基に生計を立てている」と農業の他に収入源がないことを理解していた。そして『精一杯働く生活』では、生活を維持するためにできることを最大限に、精一杯毎日働く生活であると捉えていた。「高齢なのに1日中畑にいたり仕事をし次の日体調を崩すことも…できることを精一杯行っている」や「暑期中、無理をして畑仕事をしていて体調を崩してしまった方もみられ生活を維持するために無理をしている方も多いのかもしれない」など、無理をしてでも働かないと生活を維持できない自給自足の暮らしの厳しさに視点が当てられていた。

カテゴリー6《離れて暮らす寂しさ》

へき地は不便であるため子供世帯は皆町へと出て行ってしまった。離れて暮らすことについては仕方がないことだと思いつつも、寂しさを感じている。

『家族と離れ離れの寂しい生活』では、子供たちが出て行き離れて暮らしているが、やはり一緒に暮らしたいと思っており、子供の話を楽しそうにする一方でいつも会えない寂しさがあると感じ取っていた。例えば「自分の子供、孫とともに暮らすことが難しいので、家族が離れている寂しさを感じている」と記述されていた。

2) 社会に関すること

このグループではへき地に住む人々の精神的なつながりや文化・慣習について記述されていた。

カテゴリー7《住民どうしの強い絆》

長年の付き合いを基盤に、助け合い・支え合い・協力し合う、絶ちがたい仲間関係が成り立っている。

『住民どうし親密で助け合い・支えあう生活』では、学生はへき地に暮らす人々は近隣に住む方と親密であり、助け合い・支え合い・協力し合って生活していると感じ取っていた。例えば「近所との関係がとても親密で支え合って生活しているんだと感じた」や「住む家は遠くても人々皆、結びつきが強く協力しあって生活されている」と記述されていた。また『住民どうしの強い仲間関係』では、「仲間関係がとても強く、長年の付き合いのためか信頼関係ができていることを強く感じた」と長年の付き合いを基盤に、信頼し支えてくれる人々と心置きなく分かち合える関係ができていると捉えていた。

カテゴリー8《慣習》

昔からのしきたり、やり方で日々の生活が営まれている。

『そこでの生活や習慣を守る』では、学生は「…昔ながらの生活が守られている」、「生れた時からやお嫁に来た時からのそこでの生活や習慣を守る」と馴れ親しんでいる場所や習慣を大切にしていると肯定的に捉えていたが、「嫁に行った場所で…暮らすには覚悟が必要」など別の土地の人にとってはなかなか馴染めない土地柄であるとも捉えていた。しかし、記述の殆どが抽象的な表現に留まり、詳しい内容はなかった。

3) 価値観に関すること

このグループではへき地に暮らす人々の価値

値の基準や自律性について記述されていた。

人々は自律的であると捉えていた。

カテゴリー 9

《自分らしく かけがえのない生活》

代わりに別のものをあてることができない程大切な、自ら決める自分自身の生活。

学生はへき地に暮らす人々の『自分らしい生活』に着目していた。不便な中、身体的不都合を抱えながらも馴染深い環境の中で自分らしい生活を大切にしていると捉えていた。例えば「小さい頃から住んでいる馴染深い環境の中でとてもその人らしく生きていらっシャって…」、「体に痛みがありながら、医師のいないところでその人らしい生活をするを大切にしている」と記述されていた。また、『かけがえのない生活』では、「一日一日を大切に、自然と暮らしている」や「住み慣れた場所での生活を大切にしている」など、人々がその地や日々をかけがえのないものとしておろそかにせず、自然と共に暮らしていると感じ取っていた。『生活スタイルを変えない』では、「高血圧などの既往歴があるのは自分ではわかっているけど、今まで生活してきたものは変えられないのだろう」と生活状況や長年の生活習慣など様々な因子が混在し、生活改善が簡単ではないことを実感していた。そして何よりも人々の生活が『自ら決定していく生活』、自己決定の上に成り立っていると捉えていた。「買い物をしたり、病院に行くことが不便であるのにもかかわらず、その土地を愛しているからこそ、街へ行くというのではなく、その地での生活を選んでいるのだと感じた」や「便利な世の中になったけれど、それを全部使うのではなく、自分達に必要なものをきちんと選んで生活していると思った」と不便（買い物や病院）な生活であるけれども、その土地を愛しているからこそ自らそこでの生活を選び、そこでの生活を維持していくために生活用品をきちんと選んで生活している、つまりへき地で暮らす

考 察

本研究の分析結果から見出された9のカテゴリー及び学生個々の記録から、主として以下のことが明らかになった。学生はへき地で暮らす人々の生活・価値観に関して、Ⅰ．へき地で暮らす人々は豊かさも不便さも分かち合いながら生活している（カテゴリー1, 2, 3, 5, 7）、Ⅱ．へき地で暮らす人々の生活は何らかの健康障害を抱えながらも精一杯働く毎日である（カテゴリー4, 5）、Ⅲ．へき地で暮らす人々は自分らしく生きている（カテゴリー6, 8, 9）と捉えていた。

Ⅰ．へき地で暮らす人々は豊かさも不便さも分かち合いながら生活している (カテゴリー1, 2, 3, 5, 7)

多くの学生が、実習前よりへき地は不便なところであるとイメージ⁸⁾していたが、実際にへき地に赴いた印象でも先ずその不便さに着目している学生が多かった。Ⅰ短期大学より片道2時間の距離にあるH地区の環境を目の当たりにし、自らが抱いていたイメージと照らし合わせ、見たままのレベルで不便さを捉えたのではないかと考える。例えば「買い物するにも不便…交通の便が無くて不便」など、その土地の不便さを表面的にしか捉えていないことが記述からも伺える。学生は自分の経験を超えた生活環境を前にし、正しく表象することができず、不便であると主観的な解釈を下してしまったといえる⁹⁾。しかし、へき地の豊かさに関しては、へき地に暮らす人々とコミュニケーションをとり関わる中で、人々が語る言葉や表情から不便な中で生活の知恵や楽しみ、生きがい、住民どうしの親密な関係、窮屈でなくゆったりとした生活、そして豊富な自然環境など利便とは異なる生活の豊かさについていき、それらが豊かな生活の根源であると感じ取っていた。そ

して「不便ではあるが…その人なりに生きがいがあり、楽しく生きていると思った」や「街とはまた違った時間の流れではあるが…こういう生き方もあるのだなと思った」という学生の記述があるように、へき地に暮らす人々との関わりの中で、人間はひとりひとり異なる存在であり¹⁰⁾、その人なりの生き方があるということを確認したのではないかと考える。多くの学生が「不便だけれども…」という書き出しで豊かな生活について感じたことや、考えたことを記述していた。学生は、不便なその地に何故人々が住んでいるのかと疑問を抱き、問題意識を持って人々と関わり、そのプロセスの中で自分とは異なる生活・価値観をもつ人々がいることを実感し、豊かさや不便さも分かち合いながら生活しているという捉えに繋がっていったと考える¹¹⁾。人間は一般的なあり方よりも特殊なあり方の方により関心が向かうものであるといわれている¹²⁾。特殊な生活環境といえるへき地での実習によって学生の対象の理解が一步深まったといえる。波多野¹³⁾は、看護の対象について「生物体であるとともに、生まれ育った家庭や社会のなかでその人なりの感情・考え方・信念を築き、その人なりの生活の様式をもって日常生活を送っている人である」と述べている。確かに学生は「へき地巡回診療実習」をとおして、自分の生活や価値観とは異なる人々のありようを認め、受け入れ、さらに「生活の中での知恵というものを感じた」や、「私たちが見習わなければならないことがいっぱいあると思う」など自らの生活を省みてもいた。

しかし、講義や演習、臨地実習をとおして対象の捉え方の学習を幾重にも行っているが、学生の記述の多くは人々の語られた言葉やそのときの表情・仕草からの受動的な認識、あるいは抽象的な表現の段階に留まっていた。例えば「野菜をつくったりこんにゃくを作ったり生活の中に楽しみがある」や「そこに

住む者にしか解らない良さがあるのだろう」という記述があるように、相手のこころの内を積極的に汲み取ろうとする能動的な問いかけが充分であったとは言いがたい。薄井は¹⁴⁾「…表面的なあり方にしか反応できないのが素人であり、直接目に見えないものが見え、耳に捉えられない音が聞こえ、語られない内面の訴えがひびいてくるのが専門家である」と述べている。看護の専門家を目指す学生としては対象にこころのこもった関心を寄せると共に、現象から意味をつかみとるという能力をより養うことが重要であると考えられる。

Ⅱ. へき地で暮らす人々の生活は何らかの健康障害を抱えながらも精一杯働く毎日である（カテゴリー4, 5）

この内容については、学生の理解を示す記述は具体的で多彩であった。例えば「雪かきなども少ない人数で行うため、（機械もないようだし…）かなり重労働であり負担がかかっているようだった」や「暑い中、無理をして畑仕事をしていて体調を崩してしまった方もみられ生活を維持するために無理をしている方も多いのかもしれない」など、特に健康障害に繋がる事柄について詳しく記述されていた。これは学生が看護の立場から、へき地に暮らす人々の健康状態に関心が向いていることを指し示しているといえる。言いかえるならば他人を見た場合、健康上気がかりな点を発見する能力が育ってきている¹⁵⁾といえる。さらに「今はまだ、不自由な部分があっても何とか作業を行うことが可能だが、今後が心配」と気づかいをしていた学生もいた。気づかいとは「人が何らかの出来事や他者、計画、物事を大事に思うということの意味している」¹⁶⁾といわれている。学生は看護の初学者ではあるが、へき地に暮らす人々の健康を大事に思っているといえる。また、精一杯働くについても、学生は深く認識できていたといえる。へき地に暮らす人々は、生活を

維持するためにできることを最大限に行い、精一杯毎日働く生活を営んでいると、その人の考え方・信念や生活背景に関心を寄せ相手の立場にたち替えることができていた。「体調を崩すことになってでも…できることを精一杯行っている」や「生活を維持するために無理をしている方も多いのかもしれない」などの学生の記述にもあるように、無理をしてでも働かないと生活を維持できない自給自足の暮らしの厳しさを感じ取っていた。そしてその厳しさに視点を当てながら「自分達で生活していこうとする意欲が強い」というように、それでもなお山間へき地で自分らしく生きていこうとする姿に様々な生き方があることを実感したのではないかと推察できる。へき地に暮らす人々との交流をとおして、学生が経験したことのない生活像を深めることができたのではないかと考える。しかし、へき地で暮らす人々がより自分らしい生活を維持・向上するための具体的援助方法にまで考えを馳せている者は少なく、多くの学生は健康障害に懸念を示すに留まっていた。生活の維持・向上に向けての援助方法まで思考を発展していく必要があると考える。

Ⅲ. へき地で暮らす人々は自分らしく生きていく (カテゴリー6, 8, 9)

学生は、へき地で暮らす人々が不便ではあるがその地を愛し大切にしており、そこで生活することを自ら選んでいるのだと捉えていた。「…その地を愛しているからこそ、その地での生活を選んでいるのだ…」という記述が示すように、へき地の人々が自律的であると認識したのではないかと考える。また、へき地に暮らす人々は、自分らしく生きていとも捉えていた。記述にもあったように「その人らしい生活をするを大切にしている」など、その地を愛し大切にするだけでなく、自分らしく生きること、つまり、自分自身も大切にしていることも捉えられていた。

しかし、そのためには子世帯と離れ離れに生活せざるを得ないことや、そのことでの寂しさがあることに言及した学生は少なく、高齢者が多いへき地の人々の状況やその思いまで感じ取ることが出来る学生は少なかったといえる。渡辺¹⁷⁾は、「中高年者の生活満足度には、その活動能力があり、同居既婚子と同居、友人数などが関連する」と述べている。つまり、子世帯との同居は生活を満足させる大きな要素であるといえる。殆どが高齢者であるへき地の人々の生活を考えると、気づいてほしい点である。慣習についても、慣れ親しんでいる場所や習慣を大切にしていると気づいていたが、記述の殆どが抽象的な表現で具体的な表現はなかった。例えば、「…そこでの生活や習慣を守る」といったことは記述されているが、どのような内容であるのか記載されていない。「その人なりの感情・考え方・信念、その人なりの生活の様式」というところでは関心を向けることはできているが、抽象的であったり、内容に浅い部分がある感は否めない。その人らしい生活や自律的に生きるという意味の理解を深めていく必要があると考える。

学生の「へき地に暮らす人々の生活・価値観」の捉えが抽象的で表面的な部分があった要因として、①「へき地巡回診療実習」が一回の限定であるため人間関係の構築が弱く、関係性が乏しいため親身な関心にまで至らなかった、②見たり、聞いたりなどの受動的な捉えに終始し深い対象理解に繋がらなかった、③その人やその人の生活の変化などを、学生がバトンタッチしながら継続的に捉えていくという実習の展開が十分に機能しなかったということが考えられる。時間的制約のある中で、より学生が対象に深い関心が寄せられるよう、実習方法の改善が必要であると考ええる。具体的には、見たままの判断にならないよう見たり・聴いたり・感じたりした中か

らの問いかけを繰り返すという学習が必要である。また、学生のより深い対象理解に繋がれるよう教員の実習前・中・後をとおしての意図的な関わり、そして患者個別記録の充実、実習後に同一患者を受け持った学生どうしによるグループワークの導入などが必要なのではないかと考える。

本研究は、質問紙調査であったため、学生の感じたことやより深い考えを十分に引き出せたかという点で限界性があることは否めない。しかし、本研究で抽出されたカテゴリーは、「へき地巡回診療実習」における対象理解の教育方法を改善する上で非常に有効である。今後は、質問紙調査のみでなく、フォーカスグループインタビュー（FGI）を併用し、更なる研究をすすめたい。

注

1) 無医地区

医療機関のない地域で、当該地区に中心的な場所を起点として、概ね半径4 kmの区域内に50人以上が居住している地区であって、かつ容易に医療機関を利用できない地区。

2) へき地中核病院

無医地区等を対象とする巡回診療、へき地診療所への医師派遣等へき地における医療活動を継続的に実施できると認められる病院で知事が指定したもの。主要な診療科を有し、かつ、原則として200床以上の一般病床を有する病院であり、へき地医療活動を50日以上行うことが可能な医師、看護師を配置していること。

引用・参考文献

- 1) 稲垣絹代：超高齢過疎地区で高齢者が生きる意味。老年看護学，5(1)，124-130，2000。
- 2) 吉行郁美：「へき地巡回診療」実習の学び。日本看護学教育学会誌，13，166，2003。
- 3) 鎌倉雅彦他：心理学マニュアル質問紙法，北大路書房，京都，2002，pp.35-37。
- 4) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，弘文堂，東京，2003，pp.144-208。
- 5) Anselm Strauss, juliet Colbin(南裕子訳)：Basics of Qualitative Research, 質的研究の基礎グラウンデッドセオリーの技法と手順，医学書院，東京，2000，pp.59-74。
- 6) 山本則子他：グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス，文光堂，東京，2002，pp.60-78。
- 7) Catherine Pope et al. (大滝純司訳)：Qualitative Research in Health Care, 質的研究実践ガイド，医学書院，東京，2003，pp.10-16。
- 8) へき地巡回診療実習の学び2，飯田女子短期大学看護学科成人看護学実習資料，2004。
- 9) 薄井担子：看護学原論講義，現代社，東京，2003，p87。
- 10) 佐藤豊子：看護学概説，放送大学教材，東京，2004，p14。
- 11) 前掲，超高齢過疎地区で高齢者が生きる意味，124-130。
- 12) 前掲，看護学原論講義，p82。
- 13) 波多野梗子：系統看護学講座専門Ⅰ基礎看護学，医学書院，東京，2004，p5。
- 14) 前掲，看護学原論講義，p125。
- 15) 前掲，看護学原論講義，p124。
- 16) Patricia Benner et al. (難破卓志)：The Primacy of Caring, 現象学的人間論と看護，医学書院，東京，1999，1-6。
- 17) 渡辺孟他：中高年のセルフケアとソーシャルサポート・ネットワーク。保健の科学，42(3)，187-191，2000。